

北京の中学校入学事情

北京事務所

[前回](#)の記事では北京の小学校入学事情についてお話しましたが、実は、北京の中学校への進学もそう簡単ではなく、一番大きく議論されている社会課題だと言っても過言ではありません。今回は、北京の中学校入学事情をご紹介します。

政府の基本方針

中国の学校は、小学校（6年）、中学校（3年）、高校（3年）に分かれており、小学校と中学校の9年間が義務教育とされています。しかし、北京は教育資源が非常に不均衡な都市で、名門校がたくさんある一方で、名が知られていない中学校もたくさん存在しています。

私たちが子どもだった1980年代は、統一試験を勝ち抜けば自然に良い学校に入れましたが、良い学校に優秀な学生を、良くない学校に成績の良くない学生を振り分けていたのでは、教育資源の不均衡に拍車をかけるだけで、また義務教育段階において試験で学生を選抜することは公平性にも欠けていると試験反対の声が続出し、1993年に政府は試験を廃止することを発表しました。

その後、2006年に公布された「義務教育法」に基づいて、北京市が2008年に打ち出した関連法規では、試験で学生を選抜してはいけないこと、また学生は住所の近くか、小学校に近い中学校に進学すべきことが明確にされました。卒業する小学生には、学生の戸籍住所あるいは卒業する小学校の所在地に近い中学校が複数指定され、これら複数の中学校から、希望校を申し込むこととなりました。

申込人数がその中学校の募集人数を超えない場合は、そのまま希望した中学校に進学できますが、人数をオーバーした場合は、コンピュータによる抽選により、学生が選出されます。抽選に漏れた学生については、近くの空席のある中学校に配属されることとなります。このように、コンピュータで中学校を指定することを、中国語で「電腦派席」（コンピュータ配属）と言います。

上手くいっていない現状

しかし、実際に「電腦派席」で名門校に入る比率は、その中学校の募集人数の20%前後に留まります。いったん理想の学校ではない良くない学校に配属されたら、あらゆる手を使って子どもを転校させるなど親側の問題もありますが、学校側も自身の存在感と優秀な高校への高進学率を保つために、あの手この手を講じてエリート学生を選抜しています。これは政府の政策設定に隙間があるためです。総合的な面で優秀な子どもを小学校から中学校に優先的に推薦することができる「推優」、数学・英語・音

楽・スポーツや科学技術などの面で特に優れている子どもに対して、中学校が優先的に選抜することができる「特長生」、大手企業が学校のスポンサーとして学校から一定の入学枠を与えられており、その職員の子どもが中学校を優先的に選択できる「共同建設者」という3つの特別な入学ルートがあるのです。

政府がこのような仕組みを設けたのは、優秀な子供を奨励するほか、大手企業への優遇政策の一つでもあります。その結果、小学生の間で必要以上に競争を激しくする原因となりました。現在ほとんどの小学生は、楽器や絵画や英語など、必ず何らかの塾で勉強しています。大多数の子は、習い事が好きだからではなく、良い中学に入るために行っています。また、上記の3つのルートが悪用され、条件に合わなくても名門校に入れるケースも出てきて、社会問題となっています。これは政府の最初の出発点から大きくかけ離れており、政府には制度の是正が迫られていました。

徹底的な改革

今年の4月18日、北京市政府は「2014年度中学校入学意見」を発表し、「推優」と「共同建設者」の2つの優先入学ルートを廃止すること、「特長生」の比率を5%以下に縮減してすべての小学生を一律「電腦派席」で進学校を決めることを明らかにし、厳しく実施していくことを強調しました。

この結果、今年は「電腦派席」で名門校に入る小学生の比率が、例年より随分高くなりました。今年の政策を評価している親が多くいる一方で、風雨問わずに塾に何年間も通い続けてきた子どもと親たちからは、時間とお金と努力をかけて実力で夢を実現することのどこが悪いのか、自分の運命をコンピュータに任せるなんてとんでもないことだ、と不満をあげる声も少なくありません。

今年は本格的な改革が始まる初年度であり、多少不満が出ても仕方のないことで、長い目で見ると、このような改革は、教育資源の均衡には必ず役立つものだと感じています。

(張調査員)